

2015年—アンソニー・トロロープ生誕200年を迎えて—

● 香山 はるの

2015年は、19世紀のイギリスで活躍した小説家、アンソニー・トロロープ（1815-1882）の生誕200年に当たる記念すべき年であった。日本でも近年トロロープが作家としての地位を確立した6編の連作小説、『バーセットシャー年代記』（*The Barsestshire Chronicles*, 1855-1867）の翻訳が出たことは意義深い¹、たとえば同時代のディケンズやブロンテ姉妹と比較すると総じて日本におけるトロロープの人気は低い。私はイギリスのトロロープ・ソサエティ（*The Trollope Society*）のメンバーとして、生誕200年祭に関わるいくつかのイベントに参加する機会を得た。以下はその報告である。今日のイギリスにおいてトロロープという作家がどのように受け止められているかを伝え、秋にベルギーのルーヴァン大学で開催された「トロロープ生誕200年コンファレンス」（*Trollope Bicentennial Conference*）についてもまとめた上で、トロロープの研究の動向、そしてトロロープ・ソサエティの今後の発展について考察してみたい。

イギリスのトロロープ・ソサエティの会報誌、『トロローピアーナ』（*Trollopiana*）や、ホームページ、フェイスブックにも記載されているように、生誕200年に当たる2015年にトロロープは頻繁にメディアに登場した。実際、この中にはトロロープの知名度を高めようとするソサエティ側の働きかけによるものもある。たとえば、2月7日（正午）にはイギリス本部のメンバー、そして生涯多くの旅行をしたトロロープが訪れた国々に住むトロロープ・ソサエティのメンバーが中心となって「トロロープ200」と書かれた赤い風船を200個、一斉に飛ばす「グレート・バーセット風船打ち上げ競技」（“*The Great Barsest Balloonathon*”）が行われたが²、このイベントはイギリスの日曜大衆紙、『メール・オン・サンデー』（*The Mail on Sunday*）で取り上げられた。（トロロープは日本を訪問したことはなかったが、筆者も依頼されて東京で風船を飛ばし、写真を本部に送った。）さらにトロロープ・ソサエティのフェイスブックにもロンドン、スコットランド、アイルランド、オーストラリア、ベルギー、日本で放たれた風船の写真が載せられ、様々な国にいる「トロローピアン」の結びつきがあらためて確認された。

また、2015年3月4日発行の『カントリー・ライフ』（*The Country Life*）にはトロロープの生誕200年の「特集記事」が2つ掲載された³。この雑誌の愛読者は田舎で別荘を購入したり、スポーツを楽しむことに関心があるイギリスの富裕層と一般に言われていることから、今日トロロープに関心を抱くのはこうした階級の人が多いことが想像できる。ちなみに、2013年の後半には早くも、前述の『メール・オン・サンデー』が、英国郵政省（*The Royal Mail*）は2015年にトロロープの生誕200年の記念切手を発行することを決定したという、この段階では事実というよりは希望に基づいた、むしろ郵政省にプレッシャーをかけるような記事を掲載したことも話題となった。

実際、トロロープが1834年から67年迄郵便局に勤務するかたわら小説を執筆したことから、英国郵政省はこの記念切手を始め、トロロープの生誕200年を祝う幾つかの記念行事に関わっている。2015年の4月に発行された記念切手について言えば、7,500部の限定版のシートで、「最も忙しい文学者」（“*The Busiest Man of Letters*”）という見出しの下にトロロープの人生における重要なエピソード—「惨め」だった学校時代、郵政省への就職、アイルランドへの転勤と結婚、1852

年に郵便ポストをイギリス（チャネル諸島）に導入した功績、作家としての名声確立、叶わなかった政界進出、息子が移住したオーストラリアへの旅等―が、10枚の切手によって示されている（写真①）。シートの裏側には、『パーセットシャー年代記』や『パリサー小説』等、トロロープの代表的な小説や旅行記についての解説があり、作家としての彼の業績がまとめられている。また、トロロープの誕生日である4月24日から一週間の間、英国郵政省は生誕200年を記念して「アンソニー・トロロープ 郵便ポストの父」という消印を国内で投函される郵便物に押すとともに、フリート・ストリートやピカデリー等、ロンドン市内の5つの通り⁴にあるポストに金色のプレートをつけ、イギリスに郵便ポストを導入したトロロープの功績を称えた（写真②）。

講演や展示についても充実していた。ロンドンの英国郵便博物館では4月末に学芸員によるトロロープの郵便局におけるキャリアに関する講演が行われた。また、北部のイズリントン博物館では、ヴィクトリア朝時代の初期の郵便ポストと共に、トロロープのハンドスタンプや彼が出張や旅行の間も持ち歩いて小説の執筆に使ったというライティング・スロープなどが展示された（写真③）。イギリスでも今日トロロープに興味を持つ若者は少なくなっているとしばしば言われるが⁵、その意味では生誕200年を機として、小説家としてだけでなく、郵便局長としての彼の功績があらためて広く紹介されたことはラッキーであったと思われる。

ちなみに、筆者が参加したトロロープの生誕200年関連のイベントで特に重要と思われたものは、4月23日（木）に英国国立図書館で開催されたパネル・ディスカッションと、翌日に行われたトロロープ・ソサエティの「200年記念バースデー・ディナー」、そして9月にベルギーのルーヴァン大学で開催されたコンファレンスであった。

まず、英国国立図書館でのパネル・ディスカッションであるが、「トロロープ祝賀会」というタイトルで一時間半に亘って行われた。入場料は10ポンドで（学生や高齢者等にはそれぞれ数ポンドの割引がある）、参加には事前予約を要する。パネリストは、トロロープの伝記作家として知られるヴィクトリア・グレンディニング、アンソニー・トロロープの遠縁にあたる人気作家のジョアンナ・トロロープ、「パーセットシャーのトロロープ」というワンマンショーでトロロープを演じた俳優のエドワード・フォックスである。『メール・オン・サンデー』の編集者、ジョーディ・グレイグの司会で、それぞれのパネリストがトロロープについて自由に語ったが、筆者の興味を引いたのはトロロープが『自伝』に書く内容を注意深く選んでいたことを示唆したグレンディニングと、トロロープの人間の弱さや挫折に対する洞察力について語ったジョアンナ・トロロープの発言であった。聴衆は比較的年配の方が多かったが、積極的に挙手をして質問し、パネリストとの間で活発なやりとりが行われた。

4月24日（金）のトロロープ・ソサエティの「200年記念バースデー・ディナー」は、トロロープという作家がイギリスではどのように受け止められているかを象徴的に示すイベントであった。場所はベルメル街のアシニアム（Athenaeum Club）という紳士クラブ。出席者の中には著名人も少なくない。たとえば、トロロープ・ソサエティの副会長で元首相のジョン・メージャー卿、俳優で人気ドラマ・シリーズ、『ダウントン・アビー』の脚本を書いたジュリアン・フェローズ、小説家のマーガレット・ドラブル、上述のヴィクトリア・グレンディニングとジョーディ・グレイグ、駐英アイルランド大使のダニエル・マルホール、トロロープの小説を基にしたテレビドラマや映画に出演した俳優のクライヴ・スウィフトやスーザン・ハンブシャー、カーディフ大学名誉教授のデイヴィッド・スキルトン、ディケンズ・フェロウシップ元会長のマイケル・ロジャーズ等々である。メージャー卿の音頭による「女王に乾杯」（“Toast to the Queen”）の後、トロロープ・ソサエティの会長、マイケル・ウィリアムソンがゲストへ感謝の辞を述べ、生誕200

年の記念行事として既に行われた、そしてその後予定されているイベントを紹介した。ディナーのメニューは、たとえば「パリサーのソーヴィニオン・ブラン」のワインに、「レディー・ユースタスのお気に入り」のレモン・シャーベットのオードブル、そしてメインは「フランク・グレスシャムの好物」、牛ヒレ肉のポートワイン風味というように、トロロープの小説にちなんだ名がつけられていた。筆者は日本から遠路はるばる来たということで光栄にもトップ・テーブルに座らせていただいたが、隣はアイルランド大使と『メール・オン・サンデー』のグレイグ氏、正面は法曹界の紳士、といったイギリスの「エスタブリッシュメント」に属する方々で（話題は5月に行われる総選挙のことで持ち切りであった）、トロロープ・ソサエティのポッシュな雰囲気であらためて感じた次第である。前述したスキルトン教授や *Writing the Frontier* を上梓したばかりのジョン・マコート、『侯爵の子供たち』(*The Duke's Children*) のオリジナル原稿を復元したスティーヴ・アルマナック、『ジョン・カルディゲイト』(*John Caldigate*) のグラフィック小説、*Dispossession* を出したチェスター大学のサイモン・グレナンなど研究者も出席していたが、グレイグ氏の言葉を借りれば、全体としてトロロープを「楽しむのために読む」(“reading for pleasure”) 才能にも経済的にも恵まれた人々の集まりと言えるかもしれない。デザートとコーヒーが出た後、ローマ・トレ大学のマコート教授がトロロープ・ソサエティに祝杯をあげた。そして、続くスピーカー、俳優兼脚本家のジュリアン・フェローズが『ソーン医師』(*Doctor Thorne*) のテレビ放映の予定を告げ、大きな拍手と歓声の中で「200年記念バースデー・ディナー」は閉幕した。なお、オックスフォード出版局の厚意により、このディナーの出席者にはトロロープの小説が2冊ずつ贈られた⁶。

アカデミックな催しとしては、何といても9月17日から19日にかけてルーヴァン大学で行われた「トロロープ生誕200年コンファレンス」であろう。朝の9時から夜19時過ぎまでぎっしりとプログラムが組まれた、充実したハードな3日間であった。プログラムに記されているように、このコンファレンスはトロロープの作品を多様なコンテキストにおいて再読することを趣旨としており、取り上げられるテーマもたとえば「ポリティカル・トロロープ」、「エコノミック・トロロープ」、「リーガル・トロロープ」、「ティーチング・トロロープ」、「モダン・トロロープ」、「アイリッシュ・トロロープ」、「グローバル・トロロープ」等々、多岐に亘っていて、個人的にはやや消化不良のところがあった点も否めないが、様々な切り口からあらためてトロロープの作品を考える貴重な機会となった。中でも、筆者自身はトロロープとアイルランドやオーストラリア、ニュージーランドとの関係を探る発表や欧米の大学でトロロープがどのように教えられているかという話に興味を覚えた。発表者の出身も様々であったが、半数以上はアメリカで次はイギリスであった。*The Politics of Gender in Anthony Trollope's Novels* や学術誌、『ヴィクトリアンズ』(*Victorians*) の編集も手掛けるアメリカのデボラ・ディーネンホルツ・モース(ウィリアム・アンド・メアリー大学) とその仲間による発表が多く、今日のトロロープ研究の先導的な役割を果たしているように思われた。モースの最近のエッセイ、“The Way He Thought Then: Modernity and the Retreat of the Public Liberal in Anthony Trollope's *The Way We Live Now*, 1873” や2015年5月4日の『ニューヨーカー』(*The New Yorker*) に掲載されたアダム・ゴブニックによる“Trollope Trending: Why He's Still the Novelist of the Way We Live Now”を読む限り⁷、今後『当世の生き方』(*The Way We Live Now*) や『パリサー・シリーズ』等の政治小説におけるトロロープの「リベラリズム」が一層注目されるのではないかと思われる。

このコンファレンスはイギリスのトロロープ・ソサエティが主催したものではないが、会長のウィリアムソン氏を始め多くの委員が出席していた。しかし、アカデミックなイベントでは時

に一般の愛好家と研究者の融合が難しいこともあり、今後トロロープ・ソサエティがこうした学術的な催しにどのように関わっていくのかは検討すべき大きな問題であろう。また、トロロープ・ソサエティには安定した社会的地位を持つ比較的裕福なメンバーが多いことは既に示唆したが、他方、「高齢化」の問題も看過できない。ルーヴァン大学のコンファレンスではリヴァプール大学の大学院生やアバディーン大学を卒業したばかりだという若者と話す機会も得たが、この世代の「トロローピアン」は非常に少ないことも事実である。「若者の文学離れ」はイギリスに限った問題ではないが、トロロープ・ソサエティは最近ではフェイスブックによる広報やオンラインによる読書会にも力を入れるなど情報発信の面で時代に即した工夫を行っており、これが若いメンバーの獲得に繋がっていくか今後注目される。

最後に、「生誕200年」を締めくくる2つのイベント―「レディー・アナ」(*Lady Anna*)の劇場公演⁸と、ウェストミンスター寺院の「ポエッツ・コーナー」にあるトロロープの記念碑にトロロープ・ソサエティのメンバーがリースを手向けた儀式⁹―を挙げ、この報告の結びとしたい。



写真① トロロープ生誕200年の記念切手シート



写真② ピカデリーの郵便ポスト。イギリスにポストを導入したトロロープの功績を記した金色のプレートがつけられている



写真③ トロロープが旅行中、執筆の際に机として使ったライティング・スロープ

注

1. 木下善貞氏の訳による『慈善院長』、『バーチェスターの塔』、『ソーン医師』、『フラムリー牧師館』、『アリントンの「小さな家」』、『パーセット最後の年代記』（開文社出版）。
2. 風船にはトロロープ・ソサエティの連絡先を記したタグが付けられていて、拾った人はそちらに申し出れば「賞品」が贈られるという「ゲーム」の要素も加わっていた。
3. Jeremy Musson, "A Comedy of Manors," pp.50-53. Clive Aslet, "The Voice of Experience," pp.56-59.
4. 1855年にロンドンで初めてポストが設置された通りである。
5. ちなみに、2016年1月17日現在、トロロープ・ソサエティのホームページに掲載されている「トロロープと私」という読者へのインタビュー形式の記事の中で、元弁護士のニッキー・バーンズさんはトロロープの典型的なファンのイメージは、「30歳以上の教養のある人」と答えている。<https://trollopesociety.org/trollope/anthony-trollope-and-me/>
6. 「一冊はご自分のために、もう一冊はお友達にプレゼントしてトロロープの面白さを伝えて下さい」という趣旨であった。
7. http://www.branchcollective.org/?ps_articles=deborah-denenholz-morse-the-way-he-thought-then-modernity-and-the-retreat-of-the-public-liberal-in-anthony-trollopes-the-way-we-live-now-1873. <http://www.newyorker.com/magazine/2015/05/04/trollope-trending>
8. 劇作家のクレイグ・バクスターによる“Lady Anna: All at Sea”は、ロンドンのパーク・シアターで8月19日から一カ月上演され、『テレグラフ』（*The Telegraph*）等の新聞で高く評価された。
9. 2015年12月4日、午後3時の「夕べの祈り」（Evensong）の後、行われた。